石山寺

石山寺は大津市内を流れる瀬田川の西岸、伽藍山の麓にあります。はるか昔の時代には、この真言仏教寺院の敷地には山腹へと上っていく何段もの平地が含まれ、聖域にある建物が次第にその姿を現すようになっていました。

石山寺は 747 年に僧、良弁（689–773）が創建したと伝えられています。良弁は奈良の東大寺も創建しています。東大寺は銅で造られた大仏で有名です。伝説では、銅の大仏には金メッキを施すことになっていましたが、当時の日本は金をまったく産出しなかったため、像を完成させるのに十分な量は確保できていませんでした。良弁は、自身の念持仏を現在の石山寺の地にあった岩の上に安置し、解決策を祈りました。祈りはこたえられましたが、その時にはもう仏像は岩から外れませんでした。そこで、その辺りに石山寺を建立しました。

山そのものの一部が黒っぽい硅灰石でできており、本堂の前にはこの石が巨大な姿で地上に露出しており、半円状の岩の塊を形作っています。この聖なる岩の最高の眺めとなるのは、二重の塔（多宝塔）へと至る階段を上っていって、上から眺めた時です。楓や杉の木がアーチ状に通路に覆いかぶさって、ジャングルといってよいくらいの雰囲気を生み出し、これは葉が色づく秋にはとりわけ印象的です。本堂からは青葉茂る自然の眺めが開けており、周囲の森林地帯を眺められる展望台のような役割を果たしています。

木造の多宝塔は、この種のものとしては日本最古の建物です。1194 年に鎌倉時代（1185～1333）の初代将軍である源頼朝（1147–1199）が建てました。塔の 2 層の屋根の特徴的な緩やかな曲線は、この大きな建物に優美な軽やかさを与えます。多宝塔は国宝に指定されており、内部に収められた彫像と絵画は重要文化財に指定されています。

石山寺は高貴な女性の紫式部が 11 世紀に世界初の小説、源氏物語を書き始めた場所として知られています。紫式部はこの寺院の最高地点から琵琶湖上の満月を眺めていて、小説の着想を得たと伝えられています。この眺望スポットからの眺めは、近江八景の一つとして不朽のものとなりました。近江八景は近江国（現在の滋賀県）の美しい景観を選定した伝統あるもので、詩歌や美術の主題になっています。この眺めは満月と結び付いており、寺院は今日でも観月の会を催しています。

800 年の歴史がある東大門の左側には巨大なわらじがあり、この寺の巡礼人気が高いことを示しています。寺院は西日本の関西エリアにある西国三十三所観音巡礼の一つになっています。門は巡礼の証として長年にわたって巡礼者が貼り付けていった紙札だらけです。この風習は、歴史的建造物を保護するために中止されました。